

偽りの墳墓

偽りの墳墓

ポケット文春 117

1963年7月20日 初版発行

定価 220 円

著 者 ^{あゆ}鮎 ^{かわ}川 ^{てつ}哲 ^や也 ©

発行者 小 野 詮 造

発行所 文藝春秋新社
東京都中央区銀座西8ノ4

印刷 図書印刷
製本 大光堂

落丁乱丁がありました場合はお取りかえいたします

偽
り
の
墳
墓

推
理
長
篇

鮎
川
哲
也

文
藝
春
秋
新
社

一	夜おとずれた客	5
二	湖畔の疑惑	23
三	カードの数字	46
四	服は汚れていた	67
五	手紙と万年筆	89
六	白い猫	108
七	なぜ驚いたか	131
八	雨の唄	154
九	残された解釈	174
十	破局の対話	193

装幀
初山
滋

一 夜おとずれた客

一

山野捨松は駐在所の敷居をまたぐときに、くるぶしを、いやというほど柱にぶちあてた。見ていた畑巡査は思わず顔をしかめたが、本人はまるで痛みを感じない様子だった。

「駐在さん、とんでもないことが起きました。ちょっと来て、みてやって下さい」

声がうわずっている。毛深い捨松の顎のあたりは、不精ひげが一面にはえていた。十時だというのにまだ顔も洗っていないらしいのである。巡査は左手を火鉢の上にかざしたまま、とがめるような調子で云った。
「どうした、慌てくさって。おかみさんが家出でもし

たと云うのか」

彼ら夫婦の仲がよろしくないということは、畑巡査もよく知っていた。この、館山寺の小さな町では、どんな小さな出来事であつても、すぐに拡まってしまうのである。

「そんなことじゃないんだ。によ、女房が……」

絶句して、ごくりと唾をのんだ。

「かみさんが何うした。落着きなさい」

「女房が自殺したのです」

「なに！ 死んだ？」

今度は巡査があわてた。細君の山野いくはとって四十歳になる愛嬌のいい女である。色が白く小肥りで、いつも目尻をさげ、微笑をたやしたことがない。

捨松の経営する土産物店がなりたつていくのは、彼女が店番をしているせいだというのが、専らもっぱらの噂である。猪頭いのちで、目のぎよろりとした捨松が店にすわっていると、ほとんどの客が素通りしていくのであった。いくを自殺へ追いやったものは、夫の捨松が年甲斐

もなく、湖を船でわたったところに住んでいる水商売あがりのある女に、入れあげているせいに違いなかった。それを思うと、巡査は急にむかむかと腹がたってきた。それも、水のしたたるような好男子ならばともかく、捨松の顔はどこかぬうつとしていて、牛に似ている。もぐらが目をむいたような恰好かっこうのこの五十男はどう見ても女によるめかれる柄ではないのだ。

「どうやって死んだ？ 毒か」

立ち上りながら巡査はたずねた。彼はまるい顔に、小さな鼻下ひげをたくわえている。怒るとすぐ赤くなり、その髭をあらあらしくなでる癖があった。

「毒じゃない」

捨松は興奮していた。言葉つきがいつになく素っ気なかった。

「刃物か」

「ちがう」

はげしく首をふった。ここで問答をくり返すよりも、一刻も早く現場をみてもらいたい様子だった。

畑巡査が奥へむいて、ちょっと出掛けてくるからと怒鳴っている間に、捨松ははやくも外にとびだしていた。あわい二月の陽ざしの下を、革のジャンパーの背をまるめて歩いていく後ろ姿は、さんざ女房を泣かせていたくせに、うちひしがれたように元気が失せてみえた。

館山寺は浜名湖の東岸にある小さな温泉町である。東海道本線の鷺津駅でおりて遊覧船にのれば、調子のいいエンジンの音をひびかせながら、途中いくつかの村や部落に「寄港」して、一時間と二十分ほどのちに館山寺の温泉旅館のすぐそばに横づけになる。一方浜松からいくには、駅前で客待ちをしているタクシーにのって、三十分あまり走りつづけねばならない。

いずれにしても交通の便はあまりよくない。だから館山寺の温泉町を構成しているのは、宿屋と土産物屋と飲食店ばかりであり、一般の民家はほとんどなかった。そしてその商店は、どれも木口があたらしい。それが、温泉の湧出がごく最近の出来事であることを語

っていた。

駐在所から船着場のほうにむかつて一本道を一〇〇メートルほどいった左側に、捨松の店があった。赤いカニの絵をえがいた看板が、軒の上にはりだしている。片仮名でカニ屋としてあった。

店には白い木綿のカーテンがはりめぐらしてある。はたらき者のいくが、毎朝七時になると店をあける習慣であることを、巡査は知っていた。早発ちの浴客が始発のバスに乗る前に、記念のみやげを買っていくからである。だから、十時をすぎてもガラス戸が閉じられたままになっているのを見ると、それだけでなにか異常のあったことが察しられるのであった。

捨松は店の前でふり返り、立ち止って畑巡査のやってくるのを待っていたが、二人の間の距離がせばまると、くると横をむいて狭い露路に入っていくと、裏口の木戸をおしあけた。その先は裏庭になっており、小さな梅の木の根本のところに、ひとむらの水仙が黄色い花を咲かせていた。

勝手口の扉をあけた。そして固い表情のままちょっと後ろをふりむいてから、捨松はコンクリートのたたきにサンダルをぬいだ。赤くぬった、死んだ細君のサンダルだった。

狭くはあるが、綺麗ずきのいくにふさわしく、きちんと片づいた台所である。流しの水きりには茶碗がふせてあり、ふきんは白く洗いぬかれている。棚の上の壺には白い紙がはりつけてあって、それぞれに、マジックインクで砂糖だとか塩だとかの文字が記入されていた。流しの横の板の間に、呑みほした珈琲（イロイロ）のカップが二つと、洋銀のミルク入れをのせた金属盆（イロイロ）が置いてある。なかなか洒落たものを呑んでいるんだな、と畑巡査は思った。彼は、番茶と洪茶のほかは口にすることがなかった。喉がかわいたときには、女房がくんでくれる井戸の水がいちばん旨いと思っている。珈琲や紅茶などは、ぜいたくな人種が呑むものと決めていた。

「どこだね？」

屍体のありかを訊いた。

「二階です」

捨松は抑揚のない口調で答え、台所と茶の間の境の急な階段をのぼりはじめた。木の段は暗く、踏むたびに足の下でいやな音をたててきしんだ。

上ると小さな廊下がある。唐紙をあけたところが六帖の寝室になっていて、その奥にもう一つの六帖がつづいていた。そちらは表の通りに面しており、その窓から外をのぞこうとすると、視界の半分は入口の上の、カニの絵の看板が横に長くさえぎっているはずだった。しかしいまは、その窓にもうす緑のカーテンがおろしてある。

手前の六帖は窓がなくて、天井につけはなしになっている蛍光灯のよい光が、やわらかく室内をてらしていた。この家の二階には、まだ夜が滞在しているようだった。火の気のない部屋は冷たくひえきっており、くしゃみが出そうになった巡査はあわててポケットのハンカチをとりだすと、鼻にあてた。

二つの部屋の境のふすまは大きくあけられてある。

その鴨居の下に、ふだん着のままのいくが、心持ち首をななめにかしげるようにして、ひっそりとぶらさがっていた。鬱血した顔はむくんだようにふくれ、生きていた頃の面影はまったく失せている。烟は気味わるく思うよりも、その変りようがいたいたしくて正視するにしのびなかった。そして、こうなったのもこの道楽亭主のせいなのだと思うと、忘れかけていた怒りが、また胸のなかにふくれ上ってくるのであった。

鴨居と頸とをむすびつけているのは、びんと張った一本の細引きだった。生から死への橋わたしをしたこの綱は、いくが洗濯物をほすために使っているもので、いつも廊下のつき当りの壁にかけてあることを、あとで捨松から聞かされた。

捨松は目をそらせ、整理だんすの上にかざられたコケシ人形をながめている。巡査は屍体に近づいて、だらりとたれた手にふれてみた。ひやりとした。それは指先から頭のしんを突きぬけるような、衝撃にも似たつめたさだった。

巡査はあわてて手をはなした。

「遺書はあったかね？」

「それが、どこを探してもみつからないのです」

聞えるか聞えないかの小声だった。

遺書をのこしていたならば、そこに書かれているものが、夫に対する鬱積した恨みつらみであることは容易に想像がついた。ふと巡査は、この夫が遺書をすばやく隠してしまったのではないかと思った。女狂いをするくせに、一方では、捨松は体面というものをひどく気にするたちの男だったからである。

さりげなく辺りを見廻していた巡査の目が、たんすの横の屑かごに止った。自殺を他殺に見せかけようとして破った遺書を、まさかそこに捨てておくとは思えなかったけれど、一見鈍そうでいて狡猾なこの男は、また逆にずるそうでいながら抜けたところもあった。それが、ひょっとするところという考えを巡査に起させた。竹製の小さなかごの中身は、ミカンの皮と便箋の破いたものがすべてであった。巡査はやや興奮の面持に

なり、細長くひき裂かれた紙片を畳の上にならべ、もとの状態に復元させようとしていた。そうした有様を、捨松はいくぶん好奇の目をして、立ったままで眺めていた。その態度はあくまでも傍観者としてのものであり、それから一步もはみ出たものではなかった。

子等を妻を

木槿^{もくぎん}年古^{としふる}る母が門を

一目欲^{ひとめほ}りつつ帰り来にけり

破られた便箋の文字はそう読めた。

「こりや和歌だな」

指をおって数えてから、巡査は云った。あまり上手な鉛筆がきではないけれども、女の筆蹟であることは疑問の余地がなかった。

「お前の奥さんの字か」

そう云われて、捨松ははじめて頸をのぼし、しげしげと眺めた。

「そうです」

「和歌をよむのかね？」

「和歌？ 冗談でしょう。あれにそんな芸当ができるもんですか」

「だって、これは和歌じゃないか」

夫が否定するにもかかわらず、巡査は、そのような嗜好^{嗜好}が山野いくにあったのではないかと思った。たしなみという以上は奥床しさをともなうはずだから、そうした才能を亭主に誇示することはなかっただろうし、凡くらなこの捨松は、女房が歌をよむべく苦悩している姿をみても、週刊誌の懸賞のパズルを考えているぐらいにしか目に映らなかつたに違いない。彼の場合、そうしたことは大いにあり得るのである。

するとこれは、細君の辞世の歌となるのだろうか。

「この紙はどこにあったのかね？」

「え？」

「お前が屍体をみつけたときだな、机の上にちゃんとのせてあったのと違うか」

「そんなことはないです。駐在さんが屑かごのなかから取り出したときによ、はじめて見たくれえだからな」

捨松の云うことを、巡査は信用したわけではない。

だが死の直前によんだものとする、便箋の色が少しあせていたり、折りたたんだ紙の筋がいささか毛ばだっているような気がした。つまりそれは、書かれてから一ヵ月や二ヵ月の日数を経ているようにも思えるのである。

だが、だからといって辞世でないとは云えない。いくがこの亭主に愛想をつかしたのは、昨日や今日ではないのだから、自殺を思いたち辞世をよんだのも、ずっと以前のことだったかもしれないのである。

それにしても、この歌の意味をどうとるべきであろうか。

畑巡査は、あまり和歌や俳句に興味がもてない。わずかの限られた字数のなかに森羅万象を封じ込めようとするのだから、それを鑑賞するにはゆたかな想像力を必要とすることは判っているが、巡査は自分の想像

力がいたって乏しいことも知っていた。俳聖が「云いおおせて何かある」と喝破^{かつぱ}したそうだけれど、畑にとってはそれが困るのだった。

それにしてもこの和歌は解りいいほうである。大体の意味は、家出した人間が家庭恋しさにもどって来たということになるようだ。「子等を妻を」とあるのをみると、この作者には妻子があつたものと考えられるから、当然男性であると想像されるのである。

山野いくの作でないことが考えられた。するとこれは、誰かがよんだ作品を、いくが写したものと想像されるのである。

「おまえのおくさんは和歌が好きだったとみえるな」

「さあ」

そんなことは考えられない、と亭主は答えた。店番の仕事はそれほど多忙ではないから、和歌の本をよみたければ読む暇はあるはずだが、生前の細君はもっぱら週刊誌をよみふけていたと云うのである。

巡査は、捨松にことわつておいてこの家の主婦が読

み捨てた雑誌類をしらべてみた。その多くは婦人雑誌であり、和歌に関する書物は一冊もない。

訝^{おどろ}しいな、と胸のなかでつぶやいた。一体いくは何のつもりでこの一首を写しておいたのか。それを破いたことに意味があるのかないのか。どう考えてみても判らないのだった。

「あれを、おろしてやるわけにはいかないでしょうか」

さすがの捨松もあわれをもよおしたとみえ、涙ぐんだような声だった。

「そりゃいかん。自殺も変死のうちだからな。やはり検屍をうけなくてはならんのだよ」

云いながら身をかがめて、いくの血の気のうせた足の先から一メートルばかり離れたところに転がついてるミカン函を、そつと持ち上げてみた。

いくはこれを踏み台にして頸に綱をかけ、思いきり蹴^けとばして、ぶらりと宙につり下つたのである。そのさまを想像しただけで、畑巡査の顔はさらにふかく黯^{かげ}

った。

と、その函のいちばん長い稜線と、つるさがった屍体の足とたたみの間の距離を目測したときに、巡査の顔にはなんともいえぬ怪訝な表情がうかび上った。丸い顔いちめんに、疑惑のいろが濃くひろがっていった。

人が函を踏み台にする場合、安定をたもつために、底面積の大きいほうを下にむけるのが普通である。だが、巡査がミカン函をそのように置いてみると、函の上面といくの足との間に、かなりの空間ができるのだ。こころみにそれを縦に立て、もともと不安定な状態においてみても、依然として足はとどかない。

巡査が顔を上げたとき、捨松の不審そうな眸とぶつかった。土産物屋の主人も、巡査が示した動作から、事情の尋常でないことを悟ったに違いなかった。口をうごかしかけたが、巡査の緊張した顔つきに気がつくのと、云いかけた言葉をのみこんで、壁ぎわに後退した。踏み台に足がとどかないのは、この函にのって頭をくくったのではないことを意味していた。つまり、そ

こに誰か正体の知れぬ人物がいて、それがこのミカン函にのり、いくの頭をつってやったことが考えられるのである。その人間が男か女かは判らぬとしても、いくよりも背がたかく、この函にのっただけで、十分に鴨居にたけがとどくに足る身長をもっていることだけは、明白であった。

なにも自殺しようとしたいくが、他人の手をかりることはあるまい。ミカン函が踏み台としての高さに欠けているならば、階下において、リンゴ函なり醬油だるなりを持ってくればすむはずである。だから、この場にいた未知の人物は、いくの自殺を援助したのではなく、いくの体を鴨居につりさげて、自殺にみせかけに違いないのだ。

偽装自殺であることに気づいたとたんに、畑巡査は、現場保管という重要な命題を思いだしていた。ただちに本署に連絡をとらなくてはならないが、駐在所までもどって電話をかけることを自分がやるか、それとも捨松にたのむか。この店に電話はない。

だが、捨松に依頼することには躊躇を感じた。

捨松が、二年ほど前まで鷺津の小料理屋のおかみをして、いた伊達さんと熱をあげていることは、周知の事実であった。さとと世帯をもちたいという捨松の念願は、細君のいくが離婚を承知しないために、いっかな実現しないことも、町中の噂になっているのだ。カニ屋の亭主はおあずけを喰った犬みたいだと陰口をきかれていることが、とうに巡査の耳にも入っていた。

加うるに、捨松といくの夫婦は、たがいを受取人に指定して生命保険に加入している。静岡市にいる知人から勧誘され、ことわる口実がないままに、二百万ずつの保険をかけているのである。中華そば屋でラーメンをくいながら、あいつがぼっくり死んでくれれば儲かるんだがと冗談めかしく語っていたことを、畑巡査はその場に居合わせた人から耳にしていた。

いくが死ねば保険金は入るし、天下はれて伊達さんと夫婦になることもできる。いくの死は、捨松にとつて二重の意味で有利になるのであった。捨松に、いく

の死を促進したいという意志がはたらいたとしても、何のふしぎもなかった。夫婦の間の愛情は、とくに捨松の側において、とうに冷えきっていた。

捨松が犯人であるならば、電話をかけにいふりをして逃亡するおそれがある。かといって、捨松をここに残して自分が電話をしにいくと、留守の間になをされるか知れたものではなかった。

「……きみ」

巡査は、自分でもおやと思ったほど、他人行儀のかめしい声になっていた。

「署に連絡をとらなくてはならんのだが、ちょっと手伝ってもらいたいことがある。一緒にきてくれるだろうな？」

二

浜松中央警察署から捜査係の一行がかけつけたのは正午にちかく、静岡市から県警の連中が到達したのは、さらに二時間ほどのことだった。

カニ屋の周囲には縄がはりめぐらされ、立入禁止の札が、湖面をわたってくる早春のつめたい風にひるがえっていた。新聞記者たちがそうした札を無視するのが特権であるかのように振舞って、思うままに写真をとって引き上げていったあとで、ようやく捜査がはじまった。その間、捨松は駐在所のイスに坐って所在なさそうに茶ばかり呑んでいた。そして畑巡査に、たくさんの人数が一度に二階にあがると天井がぬけるおそれがあるから、くれぐれも注意をしてくれるようにと、捜査課長あての伝言を依頼したりした。

屍体が搬出されたあとの現場で、検証は四時すぎまでかかってようやく終った。その日は静岡県警の石黒裁判医にとつての誕生日だったけれど、いやな顔ひとつみせずに駆けつけてくれ、入念に屍体にふれてみて、兇行時刻は昨十日の午後十時から十一時までの間であること、犯人はいくを床の上で絞殺してからつり下げたのではなく、何等かの方法で自由をうばっておき、その上で鴨居から吊ったのであろうという意見をのべた。

頸の索溝の跡から、そう判断されたのである。

嫌疑が捨松にかかったのは当然なことであった。駐在所に使者がとび、呼びつけられた捨松は、のっそりとした姿を勝手口にあらわした。

茶色の革ジャンパーに、相変らず死んだ女房のサンダルをはいている。よごれた手拭いが、ズボンのポケットからはみ出していた。

とげとげした目つきの刑事連中にかこまれたとき、感情のにぶそうな牛のような眸に、かすかに動揺の色が浮んだようにみえたが、それも一瞬のことだった。すぐに以前のとおりの、寝不足のような、動きのとぼしい表情にもどった。

小柄の主任は、がっしりした体格をしていた。彼は階下の一室に、被害者の夫をまねき入れた。家中でその場所をのぞけば、しずかに話し合える部屋はなかった。

保険金のことや、夫婦仲がつめたくなっていることをたしかめた上で、主任は昨夜の捨松の行動を聞いた

でした。

「冗談じゃない。あたしがやったとも思っていないさるんですか」

捨松ははじめて感情らしいものをみせて、逆に訊いてきた。鼻孔をひくひくさせている。

「そういうわけではない。だが、奥さんが死ねばまるまる保険金が入ってくるという場合は、あなたを無視するわけにはいかんのですよ」

「保険金だって？」

そう指摘されてはじめて気がついたというふうに、

捨松は声をたかめた。

「あたしが保険金ほしさに家内を殺して、自殺にみせたと云うんですか」

「そう疑っているわけではないがね、こういう場合は、一応あんたが疑惑の目でみられても仕方がないだろうじゃないかね」

おだやかに主任は反駁した。疑ぐられたことが心外であったとみて、捨松の声はさらにたかまった。顔が

紅潮しかけている。

「そいつは思い違いというもんだ。いかにも保険にや入っていますがね、あたしも家内も、掛け金を途中でどこおらしたことがあるんです。去年のくれに、ちよっと商売が思わしくなかったものですからね」

唇をなめ、さらに早口になって説明をつづけた。

「あたしが加入している保険会社では、掛け金の払い込みを二ヵ月とどこおらせると、一旦「失効」ということになり、再び保険契約を復活しても、それから二年以内に自殺した場合には金を払ってくれないのですよ。つまり、こんなふうに家内が自殺したら、いまのあたしには金が入ってこないということになるんです。調べてもらえばすぐ判ることだから、嘘は云いませんですよ」

「ふむ」

「だからです、家内を殺して保険金をとろうと企んだならば、あたしは一見して他殺だとわかるような殺し方をするわけじゃないですか。首つり自殺にみせかけ